

富山大学経済学部・(旧制)高岡高商
創立50周年記念講演会



講師
大熊信行先生



明治の人間が思うこと,考えること——講師 大熊信行先生

会場の大ホールに文字通り立錫の余地もないほど多数参集した会員が万雷の拍手で迎えるなか、大熊先生は、数え年82歳とはお見受けできないくらいくしゃくしゃたるお姿で登壇せられ、「ただ今の五十周年記念式典に参列して、ほかのどんな職業においても経験できないようなことが教師にあるんだ、という思いを新たにしたい」と感慨深げに前置されたあと、時折ユーモアを混えながら、旧高岡高商教授時代を偲ばせるような軽妙な口調で現代の世相を諷刺され、要旨次のような講演をなされた。

(講演要旨)

1. 世の中で一番変わったことといえば、男女関係であろう。男女の風俗が違って服装や外見から男女の区別ができなくなったというだけにとどまらず、男女の隔り・仕切りまで無くなった感じがする。しかも、西洋に比べて、男女関係が自由になり過ぎたと思う。西洋では、今でも女性のひとり歩きは戒められ、男は女に道を尋ねるべきでなく、女は見知らぬ男に対して答えるべきでないと考えられており、男女間には敷居が存在している。戦後の日本にはそれが無い。だから、男女関係は、西洋化したというより、日本独特の崩れ方をして悪い方向に変わったといえる。
2. 次に、社会道徳が失われてしまった。日本はタテ社会だが、西洋はタテの関係もあるけれどもヨコの関係の方が強く、人間の社会は一つであるという意識がもたれている。欧米人の考え方は、飛行機事故で倒れている婦人が救護班に自分よりも重傷者の看護を頼むというシーンや、応召した米国学生が兵役拒否についての質問に対し「自分が拒否したら、結局他の人が行かねばならないだろう」と答えた事例にみられるように、不特定多数の自分以外の人達のことを配慮している。日本では、民主主義を履き違えて、自分のことしか考えない。昔は子供のいたずらに対し、親でなくても近所の大人がこれを叱った。いつの間にかこのような関係がなくなっている。
3. また、礼儀作法を軽視し、礼儀をわきまえぬ人種が増えた。「日本人は礼儀正しい」というのが、明治維新後われわれの先輩が欧米人に与えた印象であった。ところが、今日では、平然と食堂車内で着帽している男性や、廊下で唾を吐く学生をよく見掛ける。これには、履物を履く場所のすべてを室内と考えない、という日本の「土足文化」に起因するところもあるだろう。礼儀作法は、中世の騎士道や小笠原流を考えてもわかるとおり、騎士・紳士・武士のものとして発達してきたのであって、女だけのものではない。民主主義社会においては、君臣関係を基本とするような主従関係は無くなるけれども、人間の活動が組織的に行われる所には必ず上下関係がある。そして、この上下関係を円滑にするのが礼儀作法である。今からでも遅くないので、これを喧しく注意していこうと思う。
4. 結びに、固い政治的な話になるが、私は今でも、日本は経済大国といわれているが独立国でない、と考えている。自衛隊の生みの親はアメリカであり、いざという時の命令系統はアメリカが握るだろう。だから、北方領土は返還されるはずがない。ソ連の立場から見直してみれば問題の意義がわかる。沖縄が返還されたといっても、沖縄が復帰した日本列島そのものがアメリカの軍事基地になっている。国際政治の問題について、われわれはもっと大人にならなければいけない。明治の人間は、大正・昭和の人間よりも、国の独立については感覚が鋭敏であるようだ。